5. 自然体験の「引き出し」
～自然の中で子どもとかかわる大人の役割～

自然体験学習を進めるには、「引き出し」を増やすことが大切です。

この「引き出し」には三つの意味があります。それは、子どもたちが本来持っている力を「引き出す」こと、そこにかかわる大人が役割を果たすために自分の力を「引き出す」こと、さらに、大人が忘れてしまっていたことを子どもたちから「引き出される」ことにつながるということです。

自然体験学習に取り組む際の支援者の姿勢として、日頃から自分の「引き出し」の充実を図りましょう。

共　感

知識を教えるのではなく、子どもの発見や気づきの声に耳を傾け、寄り添っていっしょに考えるという態度が大切です。例えば、子どもが名前を知らない草花を見つけて興味を持ったら、「何に似ているかな？」というふうにいっしょに考えてみましょう。

想像・創造

先を見通してさまざまな状況を想定することや、フィールドにあるものがどのようにして遊びの中で活用できるかなど、想像（創造）力が求められます。日常生活の中で何気なく目にするものも、想像力をはたらかせて見るように心がけてみましょう。

感性（センス）

子どもの気づきを見逃さないためには、子どもたちが「きれい、不思議」と感じることを同じ目線でとらえられることが大切です。日頃から身近な物事の変化に敏感であるよう意識して感性を磨くとともに、子どもに自分の感覚を押しつけない態度を身につけましょう。

継　続

いつも歩いている道でも晴れの日、雨の日、雪の日で足音が変わります。一つの自然体験（遊び）でも、繰り返したり継続したりしている間に、周囲の状況の変化や子どもたちの創造力により多様性が生まれ、新たな気づきにつながります。継続することを意識してみましょう。

柔軟性

自然体験活動の中では、天候等の自然事象の変化や子どもの集中力の途切れなど、計画通りに進まないこともあります。そのようなときは、当初の計画にとらわれすぎず、状況に応じて柔軟に対応しましょう。

生き物の一員という意識

私たちの身のまわりには、見えないくらい小さなものも含めて多くの生物が生きています。自然体験を通じてそれを学んでいくことが、人間も自然の一員であり、生き物たちを仲間として大切にする気持ちのめばえにつながるということを意識しましょう。

つながりへの意識

自然の中には、「食べる」「食べられる」の関係や、水・空気・土などさまざまな物質の循環のしくみがあります。これらのさまざまなつながりが、生き物のいのちや私たちのくらしを支えていることを意識しましょう。

変化を楽しむこと

同じところを続けて観察すると、動植物が生きるための工夫をしていることや特徴的な自然現象などがわかります。花が咲いたときや木の実がなるときなど旬の様子だけでなく、一本の木や一定の場所について観察して季節ごとの移り変わりをとらえたり、天候の変化なども楽しんでみましょう。

下見

安全確認や経路等の確認も大切です。身近なフィールドも、いざ下見をしてみると、日頃は気がつかなかったたくさんの発見があります。下見で得た情報を自然体験のねらいと照らして、さまざまなプログラムの展開を考えましょう。

→ p12「下見のポイント」参照

実行

まず、支援者（保育者）自身が実際にやってみることが大切です。1～9段の引き出しを参考に、自然の中で子どもとかかわるときに必要な事柄を点検してみましょう。そして、支援者自身が新たな発見を楽しむ気持ちで取り組みましょう。